ウチダの八味丸Mと生理不順の2症例

所沢秋津診療所（埼玉県）　平林 多津司

「ウチダの八味丸M」に切り替えたことで生理不順が寛解した2症例を経験した。いずれの症例も他の処方では症状の改善が十分ではなかったが、生薬末製剤に切り替えたことで症状が改善し、しかも2症例ともに用量依存的な効果が認められた。同報告も加え、「ウチダの八味丸M」について考察した。

Keywords　ウチダの八味丸M、八味地黄丸、生理不順

はじめに

漢方薬というと煎薬以外ではエキス剤が一般的ではあるが、エキス剤以外でもいくつか保険適応の漢方薬がある。今回2症例と例数は少ないが、八味地黄丸エキス顆粒から生薬末を丸めたウチダの八味丸Mに切り替え、症状の改善がみられた生理不順を経験したので報告する。

症例 1

37歳　女性　未婚

【主　訴】 生理が不規則

【家族歴】 特記すべきことなし

【既往歴】 特記すべきことなし

【現病歴】 以前から生理周期は30日から60日くらいの周期ではあった。

(X−3)年9月25日に、冷え症、耳鳴り、めまい、頭痛、生理不順を主訴に、当院を受診した。中間証からやや虚証で生理時に症状が増悪する傾向がある等から、当帰芍薬散エキス顆粒5.0g/日を処方した。当帰芍薬散エキス顆粒の服薬を始めて、冷え症、耳鳴り、めまい、頭痛等の症状は軽減したが、生理周期は相変わらず不順のままであった。ただもともと生理は不順だったのであまり気にもとめていなかった。

X年2月5日、生理不順は相変わらずであったが、ここ2ヵ月過ぎても生理がなかったため、あらためて生理不順を主訴に漢方加療を希望して来院した。

【現　症】 身長155cm　体重49.0kg　血圧108/48mmHg　眼球結膜黄疸なし、眼瞼結膜貧血なし、頸部、胸部、腹部異常なし、前脛骨部浮腫なし

【自覚症状】 やや小柄でやや細身の女性、身体が重い、食欲はあまりない、汗をあまりかかない、寒がり、腰から下が冷える、首や背中がこる、腰痛がある、夜間就寝中の排尿はなし、排便は1回/日普通便

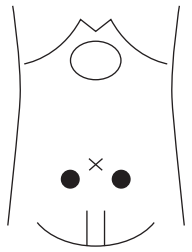
【漢方学的所見】 図1参照

【経　過】 図2経過表参照。患者は3年余にわたり当帰芍薬散エキス顆粒を服薬していた。しかし、生理周期についてははっきりした効果が認められていなかった。そこで下半身の冷え、耳鳴り、生理不順、腰痛等の自覚症状と、漢方学的所見から腎虚と考え直し八味地黄丸エキス顆粒5.0g/日を処方した。

その1ヵ月後の同年3月2日受診時、「八味地黄丸エキス顆粒の味は問題なく飲めるが、生理はまだない」とのことであった。もう1ヵ月同エキス顆粒で経過観察としたが、その1ヵ月後の同年4月8日受診時にも、「やはり変化はなく、生理はない」とのことであった。

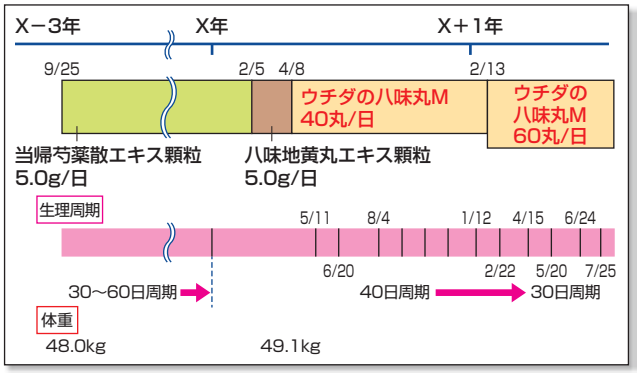
ここで八味地黄丸エキス顆粒を7.5g/日へ増量するか、他の漢方薬に切り替えるか迷った。しかし、主訴は生理不

図1　症例1　腹診



脈：やや沈やや弱
舌：湿潤した薄い白苔で被われる
腹力：中等度よりやや弱
心下部に抵抗感、臍傍の圧痛、
小腹不仁を認める
振水音はなし

図2　症例1　経過表



順で、その他自覚症状として下半身の冷えと腰痛の訴えがあった。また漢方学的所見からは中間証から虚証で、小腹不仁を認めた。そのため八味地黄丸証はあると考えた。ただ漢方薬の効果は量だけに依存するものではなく、量が少なくても少ないなりの効果が現れるのが普通である。この症例では主訴である生理不順に関しては変化はなかった。そのため薬剤を変えるのであればここはエキス顆粒ではなく、敢えて生薬末を丸めたウチダの八味丸M40丸/日とした。

そして服薬を始めて1ヵ月後のX年5月11日に5日間の生理となった。服薬をそのまま続けたところ引き続き、6月20日に、そして8月4日にと生理がみられるようになった。その後も生理はあったが、生理周期がまだ40日前後と長めだったので、(X＋1)年2月13日からウチダの八味丸M40丸/日から60丸/日へと増量した。その後生理は、同年4月15日から、そして5月20日から、6月24日から、7月25日からと、ほぼ30日周期でみられるようになっている。

症例 2

29歳　女性　未婚　病院勤務薬剤師

【主　訴】 生理が不順

【家族歴】 特記すべきことなし

【既往歴】 特記すべきことなし

【現病歴】 12歳で初潮があり、その後は18歳まで35日から42日周期で生理はあった。19歳で大学生となった。入学後から生理周期が長くなり、まもなく生理がみられなくなった。婦人科を受診したが、基礎体温は二相性にならず不規則で、その結果ホルモン療法を受けることとなった。その後は定期的に加療を受け生理も規則的にみられていたが、加療を中断すると生理は止まるという状態であった。

【図3参照】 そのため(X－5)年3月、24歳時に生理不順に対して漢方加療を希望し、前医療機関を受診した。そこで桂枝茯苓丸エキス顆粒5.0g/日と六味丸エキス顆粒5.0g/日を処方され服薬し始めた。当院へは同年6月24日に同主訴にて初診した。始め前医からの処方を引き継いだが、生理周期が不安定だったため同年10月1日に六味丸エキス顆粒5.0g/日から八味地黄丸エキス顆粒5.0g/日へ切り替えた。その後約2年間は同処方薬を服薬したが、その間はホルモン療法を受けずに生理は35日から42日周期でみられた。やや長めの生理周期ではあったが、患者自身は安定したと考え、(X－3)年9月末で自己判断にてエキス顆粒の服薬を中止した。服薬中止後も生理は同じ周期で変わりなくみられた。

X年に入っても生理周期は42日周期で落ち着いていたが、ここ2ヵ月ほど生理がみられないため、X年8月16日に当院を受診した。

【現　症】 身長158cm　体重48.0kg　血圧102/54mmHg　眼球結膜黄疸なし、眼瞼結膜貧血なし、頸部、胸部、腹部に異常なし、前脛骨部浮腫なし

【自覚症状】 皮膚はやや浅黒く、やや細身の女性、食事は普通に摂っている、睡眠障害はなし、暑がり寒がりはなし、冷えはなし、頭痛はなし、肩こりはなし、めまいはなし、立ち仕事のため腰痛はある、夕方下肢がむくみやすい、夜間就寝中の排尿はなし、排便は1回/日普通便

【漢方学的所見】 図4参照

【経　過】 図5参照。自覚症状では主訴である生理不順の他大きな訴えもなく、仕事からくる腰痛と下肢のむくみくらいであった。診察では小腹不仁は認めるも中間証からやや実証と考えられた。しかし数年前まで桂枝茯苓丸エキス

図3　症例2　経過表①

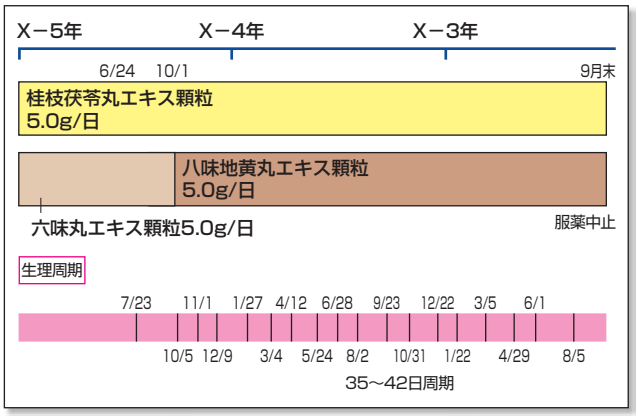


図4　症例2　腹診

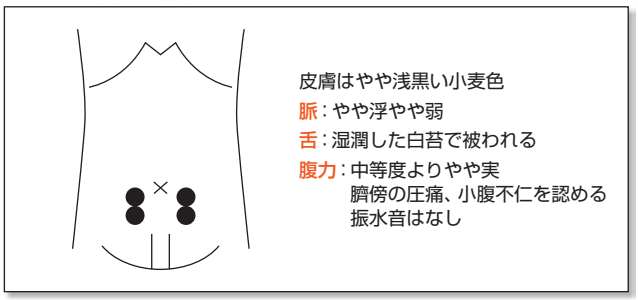
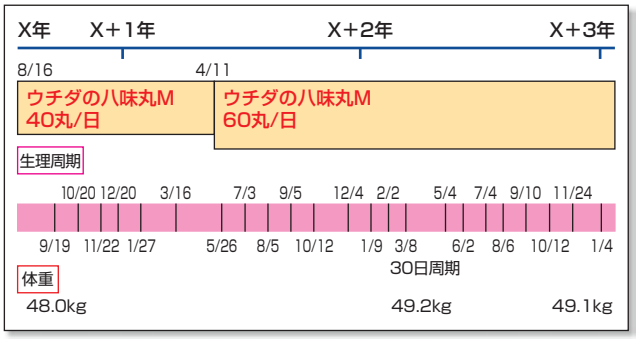


図5　症例2　経過表②



顆粒と八味地黄丸エキス顆粒を服薬し、生理周期にはそれなりに効果はみられていた。そこで数少ない自覚症状の腰痛と下肢のむくみ、そして小腹不仁から八味地黄丸証はあると考えた。ただし、前回エキス顆粒の服薬でも効果は認められたが、生理周期が長めだったことを考慮して今回はウチダの八味丸M40丸/日から始めた。

服薬し始めて約1ヵ月後の、X年9月19日から5日間の生理となった。その後も同年10月20日から、そして11月22日から、12月20日からと順調に生理はみられるようになった。しかしその次の(X＋1)年1月27日からやや周期が延びだし、同年2月には生理はみられず、次の生理日は3月16日となった。

そこで(X＋1)年4月11日受診時から、ウチダ八味丸Mを40丸/日から60丸/日に増量した。その後の生理周期は、例えば、同年7月3日から、そして同年8月5日から、9月5日から等と規則的にみられた。また引き続き同様に(X＋2)年5月4日から、そして同年6月2日から、7月4日から、8月6日から等とほぼ30日周期で規則的にみられ続けている。

【考　察】 八味地黄丸は金匱要略に記載されている、たいへん有名な漢方薬の一つである。それは地黄、山茱萸、山薬、沢瀉、茯苓、牡丹皮、桂枝、附子と文字通り八生薬から構成されており、五臓論の腎を代表する漢方薬である。

腎とは成長、発育、生殖能を司り、骨、歯牙の形成維持、水分代謝の調整、呼吸能を維持し、思考、判断、集中力を保持する機能単位であり、八味地黄丸は、その力不足、即ち腎虚を補う漢方薬の一つである[1)]。その意味では、糖尿病、高血圧症、腰痛、浮腫、腎炎、気管支喘息、認知症等適応は幅広く、またその報告例も数多くみられる[2-5)]。

加えて不妊症への報告例も多い。臼杵等は高プロラクチン血症性不妊患者、24歳から38歳の女性27例に八味地黄丸エキス顆粒5.0g～10.0g/日を経口投与し、血中プロラクチン値の改善と12例の妊娠(44.44%)を報告している[6)]。

また志馬等は難治性不妊50症例に八味地黄丸エキス顆粒7.5g/日またはウチダの八味丸M60丸/日を投与して6ヵ月までに45例(90%)の妊娠症例を報告している[7)]。この中で八味地黄丸エキス顆粒の内服で妊娠に至らなかった症例の一部に、ウチダの八味丸Mに変更したところ妊娠に至った症例が比較的多く、生薬の丸剤での効果が強まった可能性についても言及している。

婦人科疾患について成書、報告例では当帰芍薬散、桂枝茯苓丸、温経湯、加味逍遙散等の記載が多い。八味地黄丸についても述べられてはいるが、それ等に比べると多いとは言えない。その理由の一つとして八味地黄丸の構成生薬に附子が配合されているせいか、八味地黄丸の解説には「中年以降」や「痛み」「疼痛」等の記載を伴うことが多い。実際若い女性に使用することにやや躊躇してしまうのが実情である。

今回症例数は2症例と少ないが、比較的長期にわたり観察できた生理不順を報告した。1症例目は生理不順で頻用される当帰芍薬散エキス顆粒を数年来服薬していても、生理周期に関しては目立った効果は認められなかった。そのため腰から下肢への冷え、腰痛と小腹不仁を手がかりに八味地黄丸へ切り替えた。ただし同じ八味地黄丸でもエキス顆粒では変化はみられず、生薬末を丸めた丸剤に切り替えることによって症状の改善をみた。

2症例目は六味丸エキス顆粒、八味地黄丸エキス顆粒の服薬歴があり、エキス顆粒でもそれなりに効果はあった。しかし腰痛と夕方に見られやすい下肢の浮腫と小腹不仁から八味地黄丸単剤とし、しかもエキス顆粒ではなく生薬末を丸めた丸剤によって症状は明らかに改善した。しかも2症例とも用量依存的に効果が認められた。

同一の漢方薬における剤型の違いとその含有成分について、鳥居塚等は桂枝茯苓丸の煎剤と丸剤を比較し報告している[8)]。彼等は桂枝茯苓丸の煎剤と丸剤の両者に、明らかな薬効の相違を認める症例を経験し[9)]、そこから両者を比較検討することに至った。その結果、桂枝茯苓丸の煎剤、丸剤の成分含量が異なることを明らかにした。

八味地黄丸については、先に述べたように志馬等は不妊治療に生薬の丸剤化がその効果を強めている可能性について言及している。さらに今回は2症例と少ないが、八味地黄丸のエキス顆粒と八味地黄丸の丸剤においても同様にその効果を強めている可能性があり、八味地黄丸エキス顆粒と生薬末を丸めたウチダの八味丸Mとの両者の薬効の違いが示唆される。

〔参考文献〕

1) 寺澤捷年: 症例から学ぶ和漢診療学、医学書院, 1990
2) 伊藤 隆 ほか: 八味地黄丸の慢性喘息に対する効果 (第1報) , 日東医誌, 47, 433-441, 1996
3) 伊藤 隆 ほか: 八味地黄丸の慢性喘息に対する効果 (第2報) , 日東医誌, 47, 443-449, 1996
4) 加藤士郎 ほか: 生理不順を伴う気管支喘息に補腎剤が著効した3症例, 漢方と最新治療, 17 (4) , 304-309, 2008
5) 春田道雄: 精神神経科における八味地黄丸の応用、漢方と最新治療, 9 (3) , 249-252, 2000
6) 臼杵 悊 ほか: 高プロラクチン血症患者への八味地黄丸の臨床応用, 産婦人科漢方研究のあゆみ, 5, 43-54, 1998
7) 志馬千佳 ほか: アンチエイジングを目的とする“八味地黄丸”により妊娠に至った難治性不妊50症例の検討, 産婦人科漢方研究のあゆみ, 25, 99-105, 2008
8) 鳥居塚和生 ほか: 桂枝茯苓丸の製剤学的検討－煎剤および丸剤の成分比較, 日東医誌, 35, 185-189, 1984
9) 寺澤捷年 ほか: 自家製・桂枝茯苓丸の臨床効果に関する研究, 日東医誌, 35, 131-136, 1984